

アパートで聞いた話

小川未明

青空文庫

そのおじさんは、いつも考かんがえこんでいるような、やさしい人ひとでした。少しょうねん年は、その人のへやへいきました。

「なにか、お話をはなししてくださいませんか。」と、たのみました。

「どんな話はなしかね。」と、おじさんは、聞ききました。

「どんな話はなしでもいいのです。」と、少しょうねん年がいうと、おじさんは、つぎのような話をはなししてくれたのです。

二、三日まえの新聞しんぶんにあつたが、街まちの中央ちゅうおうビルディングができるので、地ちを深ふかくほりさげていると、動物どうぶつの骨ほねが出てきた。それを学者がくしやがしらべて、およそ一萬年まんねんも前まえの人間にんげんの骨ほねで、まだ若い二十歳前後の女おんならしいが、たぶん波なみにただよつて、岸きしに死しこ体たいがついたものだろう。この街まちのあるところが、当とうじ時は海岸かいがんであったのがわかるというのだ。

この記事きじを見て、私は考かんがえさせられた。大和族やまとぞくより、もつとさきに住すんでいた民族みんぞくであろう。そのような遠とおい昔むかしから、人類じんるいには悲かなしみや、不幸ふこうというものが、つきまとつ

ていたのを知つたからだ。いかなる災難か、またなやみからで、その女は死んだのであるが、若い身でありながら、人生のよろこびも、たのしみも、じゅうぶん知らずして、死んでしまつたのだ。

幾十世紀かの間に、海が陸となつたり、また陸が海になつたりして、おどろくような事実があるにちがいないが、それよりも、人間の生命のはかなさというものを、より強く感じられる。そして、いつの世でも、一生をぶじ幸福に生きるということは、容易のことではないらしい。

このアパートの、下のへやにいる娘さんを、うらん。つとめに出るときは、お化粧をし、そのふうがりつぱなので、人目には、いきいきとして、美しくうつるので、さぞゆか的な日を送つてゐるだろうと思つけれど、家へ帰つて、仕事をするときのすがたを見ると、つかれて顔色が青白いぢやないか。母親が病氣で長くねていては、自分は気分がわるいからとて、休むことさえできないのだ。

ゆうべも、この窓から大空をながめると、数えきれないほどの、たくさんな星の群れだ。それらの星が、思い思ひ美しく光つてゐる。なんとなく、見ていてうらやましい。おそらく、永久に夜ごと、こうしてさんらんとして輝くことだろう。それだのに、人

間だけは、どうして、こんなにはかないのだ。

私は思つた。人間には、みずからをまもり、あいてをどうとぶという美しい道があつたのを忘れたからである。それで、破滅をいそぐような、自殺をしたり、戦争を起こしたりするのだ。

自然界に法則があれば、人間界にも法則がある。どの星を見ても、ほこらしげに、また安らげく輝くのは、天体の法則を守るからだ。もし、星が、軌道をあやまつなら、瞬間にして、くだけて、ちつてしまつたろう。

「おじさんは、星を見るのがすきですか。」と、少年は、聞きました。

「わたしは、子供の時分、星空を見るのが、なにより好きだつた。神さまのかいた絵でも見るようで、いろいろふしきな空想にふけつたものだ。」

「どうも、ありがとうございました。」と、少年は、おじさんのへやを出ました。

つぎに少年は、元気な、ほがらかな青年に話を聞こうと思いました。

「お兄さん、なにか話をしてください。」と、たのみました。

「どんな話^{はなし}だい。」と、ふいにいわれたので、彼は、おどろいて、少年^{しょうねん}の顔^{かお}を見まし^みた。

「なにか、ためになるような。」と、少年^{しょうねん}がいようと、青年^{せいねん}は、うなずきながら、
「それなら、感心^{かんしん}したことがあるよ。それを聞いてもらおうか。」と、まえおきして、

「このあいだ、にぎやかな町^{まち}の通りを歩いたのだ。せまい往来^{おうらい}を自転車^{じてんしゃ}が走り、自動車^{じどうしゃ}が通り、ときどき道^{みち}はばいいっぱいの、トラックがいく。そのうえ、人間^{にんげん}でごつたがえしていた。じつさい、どこもかしこも、人間^{にんげん}ばかりだという感じ^{かん}がした。両^{りょう}がわの店^{みせ}では、たがいにおなじような品物^{しなもの}をならべて、競争^{きょうそう}をしあつてゐる。どこを見ても、ただ自分だけは生きなければならぬとあせつてゐるので、すこしものんびりとしたところがない。もし、おたがいに気持ちをかえて、生活^{せいかつ}を新しく出^{あたら}でなおしでもしなければ、人間^{にんげん}は、死ぬまで、この苦しみをつづけなければならぬだろうと、おそろしくなつたよ^く。

「しかし、お兄^{にい}さんは、いつもゆかいそうに見えるがなあ。」と、少年^{しょうねん}は、いいました。なぜなら、頭^{あたま}はきれいにわけてゐるし、くつはぴかぴか光^{ひか}つてゐるし、口笛^{くちぶえ}などふ

「そんなに、ぼくが見えるかえ。」と、青年は笑つて、話のあとをつづけました。

「歩いてあるくし、どこにも、苦労なんか、なさそうだからでした。

「それは、ぼくもたまには、ダンスをやるし、映画や、スポーツを見にもいくさ。なにしろ息づまるような世の中だもの、それくらいはしかたがないだろう。だが、そんなことしあつて、なんにもならないよ。ただゆううつを感じるばかりだ。ところが、ほんとうに考へさせられることがあつた。町を歩いていたときだ。とつぜん、頭の上の拡声器から、女の声が、がなりはじめて、夏ものの投げ売り宣伝や、駅前に喫茶店が開業した広告や、その他うるさくさえ思つたのを、なに町なん丁目のくつ店では、みなさまにいい品をお安くサービスしますといつたので、ぼくは、さつそくその店へいってみる気になつた。それほどくつが必要にせまられていたのだ。すると、たしかにほかの店よりは、よい品物が安く買えるので、求めたのである。

『時節がら、みなさまの身にもなつてみまして、てまえどもは、食べていければいいといふ精神で、ご奉公をしています。』と、主人は、いつた。いまどきこんな考え方をもつものがあろうかと、なんだか、うそのような気がしたけれど、無むじょう上にうれしかつた。

そして、急にこの世の中なかが明るくなつたようで、希望きぼうがもてたのである。たとえ、食くうために、身みを機械きかいにしてアナウンスしても、あの女おんなまでが、いい仕事をしているように見みえて、ぼくは、自分じぶんを恥はづかしく思おもつたのだ。」

「お兄にいさん。すると、自分のことばかり考かんがえず、他人たにんのことも思おもうなら、この世よの中なかは、明るくなるんですね。」と、少しょうねん年ねんは、聞ききました。

「それも、一人や、二人ふたりではだめだ。道みちを歩あるくもの、電でん車しゃに乗のるもの、めいめいが職しょく場ばをもつていて。そして、社会しゃかいと関係かんけいのない仕事じごというものはないのだから、みんなが、その気きになればいいと思うのだよ。」

二人ふたりの話を聞いて、その日ひから、少しょうねん年に、アパートの人ひとびと々みを見なおす気がおこつたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

※表題は底本では、「アパートで聞《き》いた話《はなし》」となっていました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕一

2018年8月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作成されました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆様です。

アパートで聞いた話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>